◉ 実践高校

「寺島メソッド」で自立した英語学習が！

佐々木 忠夫（ささき・ただお　宮城県小牛田農林高校）

1．はじめに

私は寺島メソッドにしたがって４月に「英語と私」というタイトルで作文を書かせている。それを見ると，本校には英語が得意な新入生はほとんどいない。

ある生徒は「僕にとっては，英語は単語を覚えたり，長文を読むことがとても難しくきらいです」と言っている。

だが，同じ生徒が，「僕は日本語も苦手なので，先生の授業で日本語力や英語力をいっぱい上げられるようにがんばりたいです」と書いている。できれば高校で英語ができるようになりたいと思っているのだ。

この嫌悪感を払拭し，生徒の願いに一歩でも近づけるような授業をするために，私は寺島隆吉氏が考案した「寺島メソッド」（「記号づけ」ということもある）を授業の中心にしてきた。

寺島メソッドの基本は英語学習の「水源地」を教えることである。「水源地」とは教える内容の根源となる原理を言い，英文法では語順，英音法では「リズムの等時性」（『寺島メソッド英語アクティブ・ラーニング』p.262）である。それらを教えるために英文法は「記号づけ」で，英音法は「リズムよみ」で指導している。

2．英語四技能の相互関係

４月，授業開きで英語の授業目標を提示する。まず，英語学習の土台は「見えない学力をつけること」と説明する。

次に，英語の力を伸ばすには，「話せるようになりたければ，言いたいことを単文でたくさん書きなさい」「聞けるようになりたければ，リズム読みをしなさい」「書けるようになりたければ，たくさん読みなさい」「読めるようになりたければ，記号をつけて読みなさい」と指示している。

これは，寺島メソッドの四技能の相互関係に対する仮説である。（『寺島メソッド英語アクティブ・ラーニング』p.260）

現在のコミュニケーション重視の英語教育で英語学力が全体的に低下しているのは，「四技能をバランス良く」指導するとして，会話中心になってしまっているからだ。

読みの力を基礎として四技能が相互に転移し合う指導ができていないため，多くの生徒が苦しんでいる。「寺島メソッド」はそのような生徒を救ってきた。

3．記号づけによる読みの授業

(1) まず「記号づけプリント」で読みの力を

「記号づけプリント」では英文の動詞に○，連結詞（関係詞，従属接続詞）に□，前置詞句に［　］をつけ，その節を［　］で囲む。

その英文の下には同じ記号の空欄があり，生徒はその空欄にそれぞれの語句の意味を書き込みながら，英文の意味を前から取っていく。

生徒に聞くと，中学校時代の読解は（　　）入りの和訳が渡され，そこを埋めたり，先生が言う和訳を書き写したりすることが多いようだ。その結果，いまだに，どの単語が主語で，どの単語が動詞なのか判別できない。

しかし，この記号がついていれば一目瞭然である。やがては一人で主語や動詞が判別できるようになる。実際に「動詞と準動詞の見分け方がわかるようになってきて，単語を並び替えてつくる英作問題もできるようになった」と生徒は言っている。

「記号づけプリント」の使い方は２通りある。「一斉方式」と「マラソン方式」である。

最初は「マラソン方式」で行う。「記号づけプリント」の１枚できあがったら，私が点検し，合格すれば次の１枚を与える。

生徒が完成したプリントを持って教卓の前に並ぶ。それを急いで点検し，次の１枚を渡す。授業終了のベルが鳴っても，やめる生徒はほとんどいない

06月p17_19特集実践高校.indd 17　18.4.16 7:38:59 PM

ことが多い。今やっているこの１枚を終わらせたいという気持ちが強いのだ。

これをきちんとしないと，ヒント欄にほとんどすべての語句の意味があっても，日本語の意味をきちんと書き込めなかったり，ヒントを見つけることすらできなかったりする。中学校で「眼の力」が鍛えられていないのだ

こうして「目の力」ついてくると一斉方式に移る。

(2) 記号書き込み式フレーズ訳プリント

この「記号づけプリント」で英語の語順が理解できたところで，生徒自ら記号を書き込む方式のプリントを導入する。

一度は「記号づけプリント」を行っているので，どの単語に〇がつき，どの単語が［　］で囲まれているか目にしているはずだが，一人でその記号をつけることはすぐには難しい。何度も繰り返すことでだんだんと記号が自分でつけられるようになる。

一昨年の３年生もこの方式で１年やってきたが，一般入試での国立大学合格者や私立大学特待生合格（四年間学費免除）などの成果があった。

(3) 文法こそ記号づけで

寺島メソッドでは英文法を「幹」と「枝葉」に分ける。そして，「幹」だけを教える。（『寺島メソッド 英語アクティブラーニング』p.211 参照）

この記号で文法の幹が単純明快になる。文法事項の説明や練習問題を行うとき，記号をつけておけば，英文の構造が一目瞭然になり。練習問題も取り組みやすくなる。並びかえ英訳でも，日本語に「寺島記号」をつけておくだけで格段に取り組みやすくなる。中学校時代に理解できなかった文法事項がわかるようになったといっている生徒が多い。

「否定文や疑問文の組立方もこれで視覚的にわかりやすく見つけることができた」「中学校の頃の英語では，to 不定詞や現在完了が苦手で…（高校の）授業で不定詞や現在完了をやってわからなかったところがわかったり…」

4．「リズムよみ」の授業

(1) 個々の発音より「リズムの等時性」を優先

英語音声の特性は「リズムの等時性」である。個々の単語の発音指導は切りがなく，生徒にとっては難しい。それよりは英文のリズム指導の方が，はるかに英語らしい発音に近づけられ，しかも，生徒が楽しみながら取り組める。

「リズムよみプリント」には内容語に大きな □，機能語に小さな ○ の記号がついている。ペンで机などを叩きながら，大きな □ のついている単語を強く読むのである。

イギリス出身の ALT が，これを見て幼稚園時代に同じような音読をしたと言っていた。

また，発音の難しい単語にはカタカナを振っておくが，「リズムよみ」をすることで，英語らしい音に変化するのである。しかし，カタカナすらきちんと読めない生徒がいるので，それを読む練習から始める。その後，「リズムよみ」をする。

「リズムよみ」は，まず寺島メソッドの「三つの基礎教材」There's A Hole，The House That Jack Built，The Big Turnip で始める。教科書の本文もこれで読むのだが，教科書はすべてではなく，時間の都合上，一部にしている。

ある生徒が，Bette Midler "The Rose" の「リズムよみ」体験を次のように語っている。

「やはり "The Rose" の授業は印象にも記憶にも残っている。ペンでリズムをとりながらの音読方法ではじめてやったのが "The Rose" だった。（中略）その曲が作られた背景と同名の映画について確認した後，練習が始まった。ペンでリズムをとって，はじめは文章を読むかのように歌い始めた。一つひとつの言葉に意識しつつ，"この言葉は発しない" "ここはつなげて" というアドバイスを受けながら発音に注意した。今までただ何となく楽しく歌っていたが，高校になるとその歌さえも立派な授業として成立することに驚いた」

(2)「リズムよみ」から「合わせよみ」へ

教科書で「リズムよみ」を行う場合，まず１文ずつ「リズムよみ」を行う。それができるようになったら，一段落を通して，または１ページ通して「リズムよみ」を行う。これを「通しよみ」という。

さらに，「合わせよみ」を行う。これは CD の音源や ALT の範読から１秒遅れて読むのだ。これは音声をきちんと聞かないとできないので，リスニング

06月p17_19特集実践高校.indd 18 18.4.16 7:38:59 PM

力も鍛えることになる。

このように段階を追って「リズムよみ」指導をすることで，「表現よみ」も無理なくできるようになる。

5．生徒の反応から見えてくるもの

(1) 和訳が自分でできる

前述したように，中学校時代はほとんど和訳の訓練がされておらず，英語の苦手な生徒が多い本校では和訳を一人でできる生徒はほとんどいない。寺島メソッドを使うことで，生徒は「自力で和訳ができる」という実感をつかみ始めている。

英文の意味をとらえるための要である動詞をきちんと見つけられるようになってきている。「今まで準動詞と述語動詞の区別がわからなかったけど，高校に入って，だいたいわかるようになりました」

さらに「和訳プリントをしていくうちに，（中略）前は少し戻って何回も何回も同じ単語を確認していましたが，最近では（それが）減ってきました」とあるように語彙力もついてきている。

(2)「リズムよみ」の力にびっくり

「リズムよみ」をすることでリスニング力もついてくることに驚いている生徒がいる。ある生徒は次のように言っている。

「（ホームステイで）来てくれたアメリカ人の人に話しかけるときには私の英語は１回でわかってくれましたが，中学生の弟が話すと通じないことが多く，弟は必死で発音を意識していましたが，なかなか伝わらないということがあり，リズムで読むことが大切なんだと実感しました」

さらに別の生徒は，次のように言っている。

「中学校時代は，私は英語をまったく聞き取れず，リスニングテストなどはあまり良い点を取ることができませんでした。しかし，少しずつ聞きとれるようなってきました。リズム読みの強弱や発音に気を付けることで，今まで聞き取ることができなかった単語などを少しだけですが，聞きとれるようになったのです。ついこの間，母（元キャビンアテンダント）が自分の部屋で外国人の方と電話で話をしていました。（中略）その会話を聞くことができました。どうせ難しい会話だろうなと思いながらも，自分で聞き取ってみようと思い，聞いてみると，２～３文ですが，聞き取ることができました。とても嬉しかったです」

(3) 英語が好き！

この１年間で生徒は今までできなかったことができるようになったと実感している。それによって少しずつ英語が好きになり，これからも勉強していこうという意欲が出てきているようだ。

「（英語の）授業が少し楽しいと感じるようになりました」「前までは英語がほとんどわからなくてぽかんとしていることが多かったのですが，少しずつわかるようになり，英文も読むだけでなく，読みながら意味を捉えられるようになりました」

6．おわりに

文科省の方針がコミュニケーションに偏ってきている中で逆に英語嫌いが増えている。しかし，「楽しい」が英語学習を続ける力になる。

生徒は「（自分の好きな）曲の歌詞に英語が出てくるとスマホや辞書を使って意味を調べることが多くなった。そして，歌詞の意味がわかった時はとても嬉しく達成感を味わうことができるので，まったく苦痛ではない」と言っている。

また，前任校で，英語の苦手な生徒が大学に合格したあと入学前の英語課題を自分で記号をつけながら読み切って課題提出し，周りを驚かせた。

そんな生徒を作ることができれば，後は生徒が勝手に勉強していく。それこそ寺島メソッドの目標であり，その醍醐味を私は日々，味わっている。

私は初任のとき「寺島メソッド」に出会った。以来，寺島メソッドに関するさまざまな文献を読み，授業を作ってきた。「わからない」に出会う度に何度も理論書や実践書を読み直した。そして，「わかる」「楽しい」の声に励まされ続けて現在に至っている。

〈参考文献〉

・寺島隆吉『英語記号づけ入門』『英語にとって授業とは何か』（三友社），『英語にとって文法とは何か』『英語にとって音声とは何か』（あすなろ社）
・寺島隆吉（監修）山田昇司（編著）『寺島メソッド英語アクティブラーニング』（明石書店），この巻末に関連文献が網羅されています。

06月p17_19特集実践高校.indd 19 18.4.16 7:38:59 PM